

延慶本奥書・応永書写『平家物語』四周の書物ネットワーク

——根来寺「四周」——

牧野和夫

ここに今後の熟覧の機の恵まれることを期待しつつ、メモのまま記述して備忘としたい。

一、思融と家原寺

—附「良殿—円海」・「良舎—円海」「思融—円海」—

軍記・語り物研究会大会（2011/8・30於鶴見大学）において「延慶本奥書・応永書写『平家物語』四周の書物ネットワーク—東アジアへ（から）の経路—」と題した研究報告を行った。シンポジウム「軍記物語とアジアの仏教世界」というテーマに即した内容になったか甚だ心許ないが、つとめて北東アジアを視界の一角に意識しつつ、熟さないものまでもあえて材料として提示したつもりである（機関誌『軍記と語り物』48号所収拙稿参照）。

一方で、いまひとつの問題（延慶本奥・応永書写『平家物語』と根来寺）に連関させる材料をも併せて提示したが、拠るべき聖教類の実査熟覧の機を得ぬままの覚書（今後の調査予定、或いは調査希望メモ）という形のもので当日はほとんど触れずに省略した。

旧著『日本中世の説話・書物のネットワーク』において第三章に「師資相承（「良舎—遍融—円海—秀範」）の周辺と説話」を設けた理由のひとつは、その収録するところの「応永書写・延慶本『平家物語』研究の現在」の第「二、真空・良舎・円海・秀範」への呼応という意図があつた訳で、その収斂するところには延慶本奥書・応永書写『平家物語』が厳として存在していたのである。

太子堂長老円光上人良含が『円照上人行状』に挙げられる円照門下の「円光」「円光房」「良含」であるということ、その門下に「八坂寂仙上人遍融（『七天狗絵詞』撰者のひとり）」や「覚道房円海」がおり、その覚道房円海が根来寺清浄金剛院五坊良殿と「互為師資儀」と注記される相承をうけた遁世上人であったことは、既に指摘しているので省略する。

甲田宥咩氏が「徳治二年（一二三〇七）に白毫院静基の口説を記した血脈鈔（続真25『野沢大血脈』）」（『密教文化研究所紀要』13号 2000・2）と記すが、続真言宗全書の巻25『野沢大血脈』は、大方、円光上人良含を経て静基に伝授された口伝・口授類によって成り立っている。東寺観智院蔵『秘抄聞書表題』は、表紙見返しに「第十七帖奥云」として「此抄者円光上人（右傍に「白毫院」）良含所受隆澄（理智院／僧正）良胤（石蔵／大日（円）上人）円珠（天王寺／相意上人／思融）（右傍に「勝鬘院」）／三師ノ口説 妙智房静基類聚之云々」とあり、白毫院良含が受けた隆澄・良胤・思融三師の口授を良含経由で相承した妙智房静基が類聚した一書であり、続真言宗全書巻25『野沢大血脈』の相承の示すところの切紙・折紙そのものの類従のようなものであろう。思融は、醍醐寺本『師資相承血脈』によれば、頼賢・親快に師事していたことが知られ、更に

『野澤大血脈』（『続真言宗全書』巻25 所収）によれば、「憲深―光寶―思融―良含」や「実賢―如実―思融―良含」、「成賢―深賢―思融―良含」などの相承血脈が示され、醍醐寺僧の許で真言諸流を学んだことが確実であるが、同時にその師資相承の先が「良含」であることに留意すべきであろう。その多くを円光房良含へ伝授しているのである。

また、既に紹介を終えた随心院蔵建武二年釈律写『陀納深密口決西勝』一帖も加えるべきであろう。随心院蔵建武二年釈律写『陀納深密口決西勝』一帖本奥書「弘長元年之比受之／実賢 如実空願上人 思融 良含」とあり、「思融」からの「御口受」が勝鬘院住持円珠大徳の鷲尾移住前後の弘長元年に行われている。すなわち、戒壇院円照門下として鷲尾の周辺で「思融―良含」の師資相承の関係は成り立っていた可能性が濃厚なのである。

かくて思融・良含の係わる典籍が存する天野山金剛寺について詳細を記すべきであるが、実査のかなわぬ現状では深く踏み込むことは望めない。若干の指摘を『軍記と語り物』48号所収拙稿に年表形式を借りて東大寺戒壇院・根来寺・金澤称名寺の関連事項列記中に注記しておいたので参照願いたい。本稿では思融と泉州家原寺との係わりについて改めて触れたい。

追塩千尋氏「古代・中世の家原寺について」（『北海学園

大学人文論集』42号 2009・3)には、家原寺と東大寺戒壇院系律との関係を思融讓渡以降において檀那の離反など芳しいものではないように解釈されたが、『円照上人行状』下に記すように、「泉州家原寺佛法大徳、以彼寺院、施与照公：上人後讓之勝鬘院円珠上人、彼之門人、于今興□、□通密教、敷演台宗」との記述の通りであろう。その「于今」は、凝然によれば『円照上人行状』の成る正安四年(1302)三月六日頃に係るか、と考える。別の箇所では「仍照公上人、以知足院、委付爾公、令興行之、圓學上人雖非受戒弟子、化導興隆、偏投照公門下、仍以上宮王院、付之令興、八幡大乘院雖付海公、々々捨之、不住持焉、家原寺付圓珠大徳、大悲院付良敏大徳、而檀那不用、寄付他人、金山院任檀那意、不付門人、……」(『円照上人行状』下)との記述があり、「八幡大乘院雖付海公、々々捨之、不住持焉」と「大悲院付良敏大徳、而檀那不用、寄付他人、金山院任檀那意、不付門人、……」との間に挟まれた「家原寺付圓珠大徳」を「海公捨之、不住持焉」「檀那不用、寄付他人」などの記述に引かれて解釈したものものの如くであるが、「知足院」や「上宮王院」などの「化導興隆」「付之令興」の例を参照すれば、各寺院の個々で完結している記述である。「讓之勝鬘院円珠上人」後の家原寺は、その門下が戒壇院系の律を軸に「□通密教、敷演台宗」という

凝然の記述に従うべきであろう。ここで言う「台宗」は、円珠の相承を考慮すると寺門系も視野にいれるべきであろう。正和五年(1316)時点で家原寺の住僧(勿論、思融門下であろう)の手に係り、『行基菩薩縁起絵詞』が制作されたことの背景には、東大寺戒壇院系の三学兼修の律が展開していたことがあったのである。詳細は別稿に譲る。

付、「良殿—円海」・「良殿—某(五坊々主・良舎の弟子)」

既に紹介を終えて久しいが、重要な資料なので必要最小限のところを再度掲出させて頂く。

「36・オ(左肩より) 清浄金剛院授与記」 36・オ

その37・オに次の如く、清浄金剛院良殿より相承伝授を受けた学僧に、頼心、順継、円海、有海、良親、快真等の名が列記されている。

37・オ

一助頼心阿闍梨

徳治二年丁未二月廿九日 於根来寺中性院

被授三寶院流許可 御年四十四 受者廿五(重受)

料理(坊主) 大夫阿闍梨 承仕良禅 駟士 有別記  
勝円房迎接院

一順繼山籠 年 月 日 於同迎接院受者〔沈〕病席

危急之間直被授之了 互為師資儀

覚道房

一円海上人 応長元年辛丑五月十三日於室生寺被奉授伝法

院本願密嚴院上人流（号西谷／流）印可

互為師資儀

（以下略）

この伝授記に認められる順繼が、既に紹介を終えている『問答抄』一冊の元奥書にその名に見える順繼であり、延慶本『平家物語』の延慶期書写の栄嚴に直結する学僧である。勝圓房順繼 順繼入寺 迎接院 文應元年（1260）生（坂本正仁氏「頼瑜直門の書写活動」『中世宗教テクストの世界へ』2003・3）というこゝで、良殿と「互為師資儀」との注記がある。即ち「太子堂上人」とも称される覚道房円海が清浄金剛院良殿と「互為師資儀」という関係を結んでいたのである。近時、横田隆志氏（『速成就院伝来『長谷寺密奏記』と奥砂子平法』《金澤文庫研究》329号 2012・10）の御指摘にもあるが、正応四年（一二九一）九月二十四日、称名寺三重塔供養僧衆として釵阿らとともに列している「覚道房」でもある。

東大寺戒壇院円照門下で慶政・承澄にも連なる円光房良舎の有力な門下に位置する円海は、金沢称名寺に親昵な係わりをもちつつ根来寺の良殿の許で「伝法院本願密嚴院上人流（号西谷／流）」を授けられたのである。しかも、戒壇院円照門下忍空の住する室生寺に「於」いてである。

既に若干の付記として紹介したこともあるが、ここに櫛田良洪氏『続真言密教成立過程の研究』（一）に奥書を注記する次の二点の悉曇関係書を探りあげる。第一は、同書の注記にある。

〔一四〕同（宝菩提）院藏本「□□初心抄」一冊の奥書に、

（奥）

此初心抄白毫院御弟子正智房云人作也、今根来寺住人中性院第五番云也、五坊大進律師良殿弟子成今五房々主也、此私聞書也、于時永正四年丁卯卯月三日於二子洲道後神光寺一書レ之、雖レ為悪筆一上求下化衆生滅罪生善為也、後見廻向明レ有レ之者也

右筆 □□□□

注14で採りあげた私に施した傍線部「白毫院御弟子正智房」について櫛田良洪氏は、次のような見解を示された。

「一体この初心抄は白毫院の弟子正智房と云う僧の著作であるが、後世にこの正智房と云う人は根来山に止住し、中性院五坊と云われる大進律師良殿の弟子となり、遂に根

来の院主となった人だと奥書にのせている。一方、真福寺蔵本に外題は「□□(梵字、シタン) 初心抄并連声抄」一帖がある。この書の内題は「□□初心抄」であって天正五年五月高野山金堂の穀屋で、真福寺の僧頼畔房堯遍が書写した本であった。この書の外題の表紙題下に「野山白毫院正智房述」とあり、更にこの書の奥書にも宝菩提院本と同じ内容がのせてある。真福寺本には寛正三年本、文明十年、同十四年、永正十六年本等何れも全く同一の奥書があるから余程広く伝写されたものに相違ない。さてこの正智房と云う僧は根来寺五坊良殿の資と云うから、良殿は新義教学の開祖とまで仰がれる中性院頼瑜の法資であることは余りにも有名で、中性院流を能くし大伝法院の学頭となり延元元年九月に七十三歳で没した僧である。良殿は嘉暦三年「十住心論衆毛抄」を著した時六十四歳で、もと高野に住した後、大伝法院の移転と共に頼瑜に伴って根来山に止住した根来の学匠である。」

ここに前述のような良殿と円海の緊密な師資相承の関係を加えるならば、次のような考えも可能であろう。実査に及ばない典籍を扱う怠慢をお許しただくとして、この真福寺蔵の「□□初心抄并連声抄」一帖は、天正五年書写と考えるならば、外題下の「野山白毫院正智房述」は天正五年五月頃乃至はそれ以降の伝承内容と考えるべきで、良殿

の時期の認識とすることはできない。しかも他の伝本にはなさそうである(一点、披見し得たより古い伝本には勿論ない)。

良殿と同時代における「悉曇」の名匠として知られ「白毫院」に縁を持つ僧侶は、白毫院長老とも称される円光房良含を措いて他にいない。東寺観智院蔵『秘抄問書表題』の表紙見返しに「第十七帖奥云」として「此抄者円光上人良含」とあるが、「良含」の右傍に「白毫院」との肩書きがある。

即ち、凝然の認める「戒壇院門下」で悉曇の学匠「白毫院」良含に師事した正智房が、根来山に止住し、中性院五坊と云われる大進律師良殿の弟子となり、遂に根来の院主となった、という奥識語と考えるのである。良殿と円海の緊密な師資相承関係、さらに室生寺忍空などの連関を併せるならば、「白毫院」良含に師事した正智房という存在を認める可能性が高くなり、ここに良殿の膝下に新たな「白毫院」良含門下を加えることになるのではないか。根来寺の頼瑜以降の「良殿・順継」などの活躍期は、東大寺戒壇院円照門下で慶政・承澄にも連なる円光房良含(正確にはその門下)と極めて緊密な一時期であった、と云わざるを得ない。そして延慶本『平家物語』の延慶時書写は、まさにこの一時期に当り、東大寺戒壇院円照の流れにも結ばれ

た「白毫院」良含門下に展開した三学兼修の律系（悉曇）の学問・書物（さらに説話）との緊密な接触が考慮されねばならない。

次の一点は参考までに採りあげておく。櫛田氏著注16には次の通りに紹介されている。

「(一六) 宝菩提院本「□□秘藏抄」四冊の第一冊の奥書に

元徳三年月日書写了 沙門真達

此書在二東岩藏寺宝藏一先年申二出於書写一所持之処、去文保之比悉曇所納皮子一合為盗人一失了、其時同紛失之間、受一又悉曇書籍一書集了、此秘藏所具之也、

抑此秘藏抄者洛陽東山大谷口白毫院長老円光上人製作也、故岩藏大円上人 悉曇大概目安可二注給一之由、依二所望一撰出所二進覽一也、本末一部四卷抄也、後註レ之、

円光上人者在世弘安年中比歟、真言之事相教相興義東寺小野広沢山門穴太流者小川承澄僧正弟子也、三井流又同兼学之悉曇即小川承澄僧正弟子也、惣而自他研学十余流云々、」頁583

この一点の詳細な解題は櫛田氏の『続真言密教成立過程

の研究』頁552に尽きるが、この度の論究に重要な一事実のみ簡略に指摘しておく。「岩藏寺円光」という悉曇の学僧に言及されたが、勿論、洛陽東山大谷口白毫院長老円光上人と故岩藏寺大円上人とは別人で、大円上人の所望により白毫院長老円光上人良含が制作したものが、『悉曇秘藏抄』であり、弟子の真達が記した識語は「本末一部四卷抄也」までであろう。

良含と大円上人「良胤」との間柄は、「良胤」からの口授を受ける一方で良含に注釈書の制作を所望することの出来るほどのものであったことが知られる（『円照上人行状』などを補強する資料、『沙石集』論—円照入寂後の戒壇院系の学僧たち—）（『実践国文学』81号所収）参照。『塵袋』・『埃囊抄』と『太平記』・『三国伝記』などの交点には血脈「良含・大円上人」の関係、「良含—澄豪—光宗」や「元応寺・金山寺」などの緊密な交渉の糸がからんでくるようである）。

## 二、根来寺とその周辺の典籍

### — 智積院新文庫藏聖教類の伝来について —

近年の寺院調査に拠る顕著な成果のひとつに継続中ではあるが、宇都宮啓吾氏を研究代表者とする智積院新文庫の報告書『智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究』（平

成20～22年度科学研究費補助金・基盤研究B研究成果報告書 2011・3)がある。延慶本奥書「応永書写『平家物語』の伝来通関係を解明しうる極めて重要な手がかりを提供するばかりか、鎌倉時代後期から室町にかけての堺・泉州という地域に決定的であった(文字資料の)空白」を埋める聖書類を数多く含むものである。ここには(延慶本奥書・応永書写『平家物語』と根来寺)に連関するいくつかの点に限り覚え書きを記すが、多くは以下の報告論文によるものである。

a 宇都宮啓吾氏「資料紹介・智積院新文庫蔵『管見抄』(断簡)について」(『白居易研究年報』10号 2009・12)

b 宇都宮啓吾氏「智積院新文庫の聖教について」(宇都宮啓吾氏研究代表者「智積院聖教における典籍・文書の基礎的研究」平成20～22年度科学研究費補助金・基盤研究B研究成果報告書 2011・3)

c 苦米地誠一氏「智積院新文庫の頼諭自筆「黒笹」聖教について」(同報告書)

d 野呂靖氏「智積院新文庫蔵『華嚴五教章』注釈書について」(同報告書)

e 大谷由香氏「智積院新文庫所蔵の戒律関連聖教群につ

いて」(同報告書)ほか

報告書の詳細に期待するところが大きい。真福寺の目録として活用可能な『大須観音宝生院』真福寺文庫撮影目録 上・下(平成9・10年3月)を併せて可能になる二、三の問題点を指摘するが、今後の更なる精査に俟つものである。

①根来寺書写本(信栄写本)の伝来

—「石曳(引)」という地域—

宇都宮啓吾氏「智積院新文庫の聖教について」に著録された典籍に

「○阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌(41函) 正平二十四年書写(1369)」「正平廿四年三月十二日於紀州根来寺大伝法院之/別院(賜)賜金剛臺院御本石曳奥有閑不■書写了/金剛仏子信栄生年/三十(新文庫蔵『阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌』41函5号)

があり、宇都宮氏の指摘する通り、

「本書は、延慶本『平家物語』の書写された場所と同じ根来寺大伝法院別所の石曳院で書写された資料である。」

(頁38)

宇都宮氏はさらに『餅五瓶作法 福五瓶加持作法 并壇敷作法』(SR23函57号)を挙げて、

(1376)「本云 永仁二年 七月上旬此記之了 介佛子頼瑜生年六十九 / 此作法未遂秘々灌頂之人不用之 / 永和二季丙辰卯月廿五日於紀州大伝法院賜中性院大法印之御自 / 筆也本於同院御室廊書写之了 介佛子信榮」

「この奥書において、信榮は大伝法院において頼瑜自筆本を得て書写し得る立場から大伝法院・中性院に近い僧侶であったと考えられる。」(頁38)

この報告書での紹介の後に宇都宮氏は、「訓点資料から見た智積院新文庫聖教の一側面」(『訓点語と訓点資料』128輯、2012・3)において更に『授灌頂金剛最上乘菩提心戒文』(15函9号)一点を加えられ、

「○授灌頂金剛最上乘菩提心戒文(一五函九号)

一帖 正平二十四年写

墨点(南北朝/返点)

朱点(南北朝/ヲコト点(円堂点)・仮名点(訓)・区

切点・合点)

「正平廿二年(己/酉) 卯月十五日於紀州根来寺有  
閑居(一) / 賜金剛台院之御本書写畢 金剛仏

子信榮」

次のように記している。

「これらの資料から、信榮は仁和寺所用の円堂点を使用し、大伝法院においては頼瑜自筆本を得て書写し得る立場であ

ることが知られ、大伝法院・中性院に近い僧侶であったと考えられる。」

信榮という僧は、真福寺宝生院「真福寺文庫」にも認められる。伝領墨署名であることで、同一僧であるかどうかの確認を必須とするが、同じ僧侶である可能性は高い。

参考として『真福寺善本目録』続輯(昭和11・5、黒板勝美編)の解題を挙げておく。

「十住心論愚草 第五ノ一、二、三、四・第六ノ一、二、三、四、五、六 十帖

縦九寸五分 横七寸

鎌倉時代末期写本、胡蝶装、紙数各五十枚前後、各帖表紙に「信榮」とあり。

(奥書)

(五一) 于時正和四年二月廿七日於根来寺大谷草庵書写

之為仏種不断矣 / 四十三 / 宥巖

(五三) 于時正和五年三月一日於大谷坊書写之畢為令法

久住利益群品矣 / 四十四 / 有巖

(…略…)

(六三) 于時正和五年九月十日於右□院之内光明真言院

西坊書写畢為令法久住矣 / 仏子有巖(生年 /

四十四) / (別筆) 信榮

(六四) 文保元年三月五日於根来寺□□院光明真言院西



坊書写畢 四十五／有嚴／〔別筆〕信栄

(六五) 于時文保元年九月一日於根来寺大谷草庵以御草  
本写之畢／仏子有嚴〔生年／四十五〕／〔別筆〕  
金剛仏子信栄 一

もし、同一僧となれば、信栄書写本が智積院新文庫に残り、信栄伝領手沢本が真福寺に伝来したそれぞれの経路の解明が俟たれる。今後、根来寺大伝法院別院の石曳院での書写を伝える聖教類の出現を智積院新文庫・真福寺の両所に期待できることとなり、別院としての石曳院の地理的な位置や役割がいささかでも解明できるのではないか。延慶年間書写時点の延慶本『平家物語』に関心のあるものにとつて興味深いものである。正平頃に根来寺外に齎されたものかどうか、「信栄」なる僧侶の行歴の判明することを期待したい。

ほかに「石曳草庵」の用例も拾える。三好英樹氏「寺内と寺外をつなぐ修験道の人びと」（海津一朗氏編『中世都市根来寺と紀州惣国』2013・6）に拠れば、『金剛界加行表白（同初行表／白散念誦）』奥書に、

〔御本云

弘長元年九月十五日、於西寺報恩院御本書写畢、

僧正御房仰云、是為初心人勘略故僧正御房被レ記本也、頼

一（瑜）

正応五年正月廿一日、於根来寺五坊禅室書写畢、良一（殿）  
元徳三年二月七日於根来寺石曳草庵、以師主御本書写了、  
増一（喜）

文明五年癸巳三月十三日、於根来寺十輪院奉レ伝受金界乏  
次、書写了、成純

永正十七年五月十九日、以御本書写了、聖盛  
享祿二年己丑十一月六日子剋書写了、弘賢 一

と記す。既に良殿の門下「有嚴」の書写奥書で指摘した（牧野「熊野本地譚の一面」『中世文学』25号、1980・12参照）が、ほぼ良殿・順継などの活躍期に葛城修験の往還の要である「石曳草庵」や大伝法院別院の「石曳奥」の位置とその別院としての性格など興味は尽きない。これらの資料は別に応永書写時点の延慶本『平家物語』についても、重要な指針を与えてくれるものである（『説話文学研究』次号所収予定拙稿参照）。宇都宮氏は前掲報告論文に、成純や亮盛・弘賢については、「以下のことが知られる」として三項目にまとめている。

〔弘源（泉州極楽寺）・亮盛（泉州家原寺満蔵院）・弘賢（同）は和泉国と根来寺を中心に活動。また、和泉国においては家原寺を中心とした大鳥郡一帯を拠点としている。

■三者は三宝院流の法系にあり、東寺宝巖院・学頭法印宝

清一同院・清聖を継ぐ、弘源―亮盛―弘賢という関係にある。

■亮盛：寛正五年（一四六四）誕生・享祿二年（一五二九）以前死去。

和泉国家原寺満藏院亮盛は根来寺初代能化道瑜の資成純と交流。亮盛も文亀二年には根来寺十輪院に住し修学していたことが知られる。この点から、亮盛と道瑜との関係も窺われる。また、根来寺中性院聖教目録を所持するなど、亮盛の修学環境の高さも窺われる。

延慶2・3 応永26・7

天文13根来寺焼亡

根来寺 ↓ 十輪院道瑜

■ 智積院新文庫（散逸和学講談所など）

家原寺 ⋮ 成純・亮盛

弘賢

玄宥

石津成覚寺 快舜

印雅・深雅

真福寺

これらの記述によって、弘源・亮盛・弘賢らの素性が窺え、また、彼らの拠点とした和泉国家原寺自体にも注目出来る。」

軍記・語り物大会のシンポジウム当日提示（予定も含む）の詳細な奥書類の徴証を省き、以上の宇都宮氏の「まとめ」にかがえる師資相承・交流をまとめ図示しておく。応永書写延慶本『平家物語』の現蔵する大東急記念文庫に至る経路のひとつの可能性について推測を深めることは出来そうである。

この粗略な経路図は参考程度のもので、今後の詳細な報告を活用し修正を加えるにしても、応永書写のいわゆる延慶本『平家物語』は、「十輪院」を経由する形を考慮するならば、自ずと伝来・通蔵の経路は窺われるように思う。その際、水原一氏「『平家物語』奈良炎上の論」(『延慶本平家物語考証 一』新典社 平成4)をどう考えるべきか、今後の課題である。

②智積院新文庫蔵『管見抄』(断簡)

宇都宮氏「資料紹介・智積院新文庫蔵『管見抄』(断簡)について」(『白居易研究年報』10号 2009・12)において誠に興味深く且つ極めて重要な資料の発見の報があり、その詳細な紹介は、以下のようなものであった。

「智積院新文庫に所蔵される『管見抄』(以下、智積院本)について検討して行く。智積院本は装幀が粘葉装で、料紙共紙表紙。料紙は楮紙打紙(素紙)が使用されている。外題は無く、巻首に各帖「管見抄一／文集一」・「管見抄二／文集二」・「管見抄四／文集四」(第五帖は中途のみ)とある。法量は、第一帖が八丁(表紙含む)で縦二十二・一cm×横十五・七cm、第二帖が二丁(表紙含む)で縦二十二・三cm×横十五・六、第四帖が二丁(表紙含む)で縦二十二・一cm×横十五・六cm、第五帖が二丁で縦二十三・一cm×横十五・六

cm。各帖とも一面七行で押界が施されている(第一帖・界高二・二cm、界幅二・〇cm/第二帖・界高二・〇・三cm、界幅二・〇cm/第四帖・界高十九・一cm、界幅二・〇cm/第五帖・界高十九・〇cm、界幅二・〇cm)。」

ということである。さらに宇都宮氏は続けて

「各帖(第一・二・四帖)の表紙左上に朱筆で以下のような識語が存する。(第一帖)「白一 一校了 朱墨二」、(第二帖)「白二 一校了 朱点 二点」

(第四帖)「白四 朱墨二点」頁250

智積院本 内閣文庫本 越抄

「第一帖

巻第一

賀雨詩

○

○

略

答友問詩

○

○

雜興詩三首

△(前半)

△(後半)

○

慈烏夜啼

○

○

第二帖・四・五帖も同じく相互に補い合う。」

と指摘し、

「また、洛東智積院へと伝えられた経緯については、第十帖の表紙から窺われる。第十帖の表紙は他の表紙とは異なり、和学講談所における後補表紙ではなく、和学講談所伝

来以前の表紙がそのまま残っている。

第十帖の表紙は茶地表紙で中央に「管見抄第十」とあり、その紙質や制作の状況、また、そこに記述された外題の筆跡等から、十六世紀頃のものと考えられる。……(略)……その表紙(装訂)から伝持者を窺うことが可能となる。本書の如き細身の縦長茶地表紙は十五世紀後半から十六世紀半ば頃の根来寺において集書活動を積極的に行なった亮盛周辺のものかと考えられる。

亮盛の生没年は未詳であるが、智積院新文庫蔵『声義字実相義愚草』第12函)には「永正第八曆六月八日令書写畢別加一校了/亮盛四十八」とある……(略)……亮盛の伝持した聖教類には、根来寺版『大日経疏』(第1函)の如き茶梨地表紙や本書の如き茶地表紙のものが多く、また、根来寺に伝来した鎌倉時代以前の古写本の多いところにもその特徴が存し、これらは洛東智積院第一世能化玄宥(一五二九〜一六〇五)、第二世能化祐宜(一五三六〜一六一二)、第四世元寿(一五七五〜一六四八)らへと伝えられ、彼らによる伝持識語が書き加えられた例も存する。本書はそのようなもの一つと考えられ、このことから十六世紀前半頃までにおいては本書が根来寺に伝えられていたことが予想され、本書は、関東田中坊↓根来寺(亮盛周辺)↓洛東智積院(祐宜・元寿周辺)↓和学講談所とい

う過程で伝持されていたものと考えられる。」  
という関東ゆかりの典籍の通蔵経路に関する貴重な指摘を披瀝された。

宇都宮氏は「智積院新文庫の聖教について」の「博士家点資料」の項でも「本書は、…内閣文庫蔵『管見抄』の僚巻と考えられ、この本書の発見によって、『管見抄』が本来は、亮盛らの家原寺聖教や根来寺聖教と関わるものであることが明らかとなり、……(頁40)と指摘するのである。

#### 附 国立公文書館内閣文庫蔵(根来寺旧蔵)『管見抄』の問題

形態上の問題と筆者をめぐって

以下に新たに根来寺旧蔵が確認された国立公文書館内閣文庫蔵『管見抄』(重4・1)九帖について若干の問題点を揭示しておく。今後の詳細な細部に亘る比較検討が期待される。

国立公文書館内閣文庫蔵『管見抄』(重4・1)九帖

甲筆…第1・2帖

乙筆…第5(内題)管見抄 六)・6(管見抄 七)・8(管

見抄 九)帖

丙筆…第3・4(管見抄 五)・7・9(管見抄 十)帖

2011年8月21日に行った実地調査（約一時間半）での書誌事項の内、各帖の寸法を記しておく。上段に内閣文庫現蔵本、下段に対応する根来寺蔵本を配した。

内閣文庫蔵・寸法

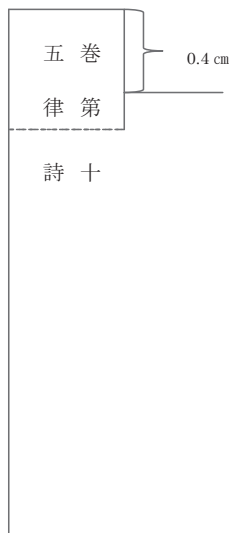
根来寺蔵・寸法

第1（一）帖（首欠）…縦二十一・九cm×横十五・五cm | 縦二十一・一cm×横十五・七cm  
 第2（二）帖（首欠）…縦二十一・九cm×横十五・四cm | 縦二十一・三cm×横十五・六cm

第三帖欠

第3（四）帖（首欠）…縦二十一・五cm×横十五・三cm | 縦二十一・一cm×横十五・六cm  
 第4（五）帖 …縦二十一・六cm×横十五・四cm | 縦二十一・二cm×横十五・六cm  
 第5（六）帖 …縦二十一・八cm×横十五・三cm  
 第6（七）帖 …縦二十一・八cm×横十五・五cm  
 第7（八）帖（首欠）…縦二十一・五cm×横十五・二cm  
 第8（九）帖 …縦二十一・六cm×横十五・五cm  
 第9（十）帖 …縦二十一・八cm×横十五・二cm

内閣文庫蔵本の各帖は、明らかに天地を裁断、幅も裁断したもの、従って、次のようなケースも出てくる。横点線箇所内で側に折り込んであり、「卷十／五律詩」は同筆墨である。虫穴の詳細な照合など、第9（十）帖表紙については、更なる検討が必須となった。



表紙に就いても今後の比較検討が必須になるうか、と思う。ところで、この典籍の筆者に就いては、現在、ふたつの筆者説が行われているので、ここに紹介したい。

筆者説A：第2部 金澤文庫本「展示品解説 67管見抄」  
「卷九の「永仁三年六月十七日未刻、関東田中坊に於いて、筆を馳せられたる（後略）」の朱筆奥書が北条実時の創建した称名寺の住僧・円種の筆跡であることなどから、その撰者を北条実時とする見解は十分尊重されて良いであろう。」  
「円種とは、実時寄進の『宋版大藏経』に加点・校合した天台・華嚴兼学の学僧で、文永年間中国に渡海し、数多の印刷経論を持ち帰った人である。」（『よみがえる中世―鎌倉北条氏の遺宝―平成二年十月・神奈川県立金沢文庫刊』）  
筆者説B：佐保切（『文彩帖』所収『古文孝経』断簡ほか）  
Ⅱ同筆公文書館蔵永仁三年写『管見抄』（数手の内の一手、第三・四（管見抄 五）・七・九（管見抄 十）帖）  
佐藤道生氏「『佐保切』追跡―大燈国師を伝称筆者とする書蹟に関する考察―」（『臨濟宗妙心寺派教学研究紀要』7 2009・5）  
ここで、佐藤氏の分類「i 佐保切」「ii 道德経切」「iii 佐保類切」の基準となる断簡類について佐藤氏の指摘を簡略に注記する。

i 佐保切…『文彩帖』所収『古文孝経』断簡Ⅱ同筆公文書館蔵永仁三年写『管見抄』（数手の内の一手）「四手の寄合書きであり、第三帖、第四帖、第七帖、第九帖の筆蹟が「佐保切」と同一と認められる。…（略）…したがって「佐保切」は永仁三年に関東に居住していた人物―姓名は未詳。整った筆蹟から見ても寺院所属の写字生であろう―によって書写されたものと言うことができる。」

ii 道德経切…『藻塩草』『翰墨城』他所収『老子道德経』断簡Ⅱ同筆宮内庁書陵部蔵永仁五年錢塘呉三郎写『古文孝経』（503・168）

「『古文孝経』の書写作業には教育の依頼を受けて従事したと考えられるから、呉三郎入道は京都周辺で写字生として生計を立てていたのであろうか。」

iii 佐保類切…『帝範』断簡

金澤文庫旧蔵彰考館蔵『施氏問対講義』二帖、巻頭卷末に「金澤文庫」印。

この転写本…天理大学附属天理図書館蔵『施氏問対講義』一軸（巻二十六残簡）本奥書

「建治二年五月六日、以／政連摺本、令顕時書／了了／越州刺史（花押）」

なお、『古筆手鑑大成 京都国立博物館所蔵 藻塩草』14巻の「208大燈国師」の解説を引用しておく。

「208 大燈国師／佐保切 ……(略) ……つれの断簡は、手鑑『翰墨城』『文彩帖』に押される。宮内庁書陵部に同筆と認められる『古文孝経』が存し、その巻末には永仁五年の年号とともに、宋の帰化人「呉三郎入道書」と見える。本断簡も、同じころに書写されたのであろうか。なお、呉三郎入道なる宋人については未詳。…(略) ……」

ところで、宇都宮氏「資料紹介：智積院新文庫蔵『管見抄』(断簡)について」には「同じ函からは、十六世紀頃書写・加点と考えられる『古文孝経』(博士家加点点本)が存し、(頁258)と記し、宇都宮氏「智積院新文庫の聖教について」の「博士家加点点資料」に「○古文孝経」(SR4函51号)室町後期／安土桃山時代 朱点・墨点 本書は十丁程度の断簡で、ヲコト点は経伝(明経点)、また親本に引かれて古体を残す箇所があり、本書の奥書は鎌倉時代中／後期頃の点本と考えられる。」(頁41)とも記している。

さらに、『管見抄』撰者実時説(阿部隆一氏説)に対して太田次男氏「(附載)管見抄と『越抄』について」『旧鈔本を中心とする 白氏文集本文の研究』中(頁204)では「管見抄の撰者を若し北条実時とすれば、その曾孫に当たる貞顕とかなり深い関係にある『田中殿』の坊に於いて、管見抄の転写が行われたということは、可能性のあることであるが、更に検討を要する。」(頁203)としている。

網野善彦氏「蒙古襲来」(同著作集第五卷P48)には、太田氏の明らかにした事実を踏まえて次のように記している。

「時政や実時が「政道」を学んだのは、ただかれらが学問好きだったからではけつしてない。……このころ『白氏文集』を書きぬいた『管見抄』という本が成立しているが(正元元年＝一二五九)、それは『白氏文集』のなかの「策」「判」など、政治の実務文を意識的に選んで写している。この事実を明らかにした太田次男氏は、このような政治に対する態度を平安時代にはまったくみられない新しい動きと指摘しているが、宋学をうけいれる地盤も、こうして豊かにつちかわれていったものと思われる。」

参考として『斯道文庫善本図録』( ) 93番掲載の一点「貞観政要」を挙げておく。

93 貞観政要 転寫縮結版

四帖

薄茶色扇面文様古表紙(二〇・〇×一四・七糎)、外題「貞観政要巻第四」、粘葉装。糞紙、両面書。本文首題「貞観政要巻第四 史臣呉兢撰」。字面高さ約二六・五糎、每半葉六行、毎行二二字。朱筆句点・ヲコト点、墨筆訓点・四声濁点を附す(巻四は朱点がない)。菅家本と称され、同じ六行二二字の室町末写本一〇巻をかけて内藤虎次郎(湖南)氏が蔵し、またそれを文化六年(一一八〇九)に菅原長親が

重抄した本の転写本が数本あることが知られていたが、卷四・五・六はこの本がそれらの原本であろうと推定される。本文も現存最古の刊本の元の曳直の集論本の系統の明刊本とは異同が少なくなく、唐抄本の旧系を残すテキストであるとされている。原田種成氏によれば（貞観政要の研究 吉川弘文館一九六五年）、この書は唐の呉兢が撰してまず中宗に上進し、一部を改訂して玄宗に再進したのであるが、この本はその再進本であるという。

ただし、卷九は紙質・筆蹟を異にする補配本で、その卷末に

本云

永仁四年師十月三日書写之訛／執筆宋人明道

永祿三年五月終書功了／李部大卿曹長雅

との書写奥書があり、鎌倉写本が失われたのを菅原長雅が補写したものと思われる。内藤本以下にも卷九にはこの奥書があつて、この巻は早く失われたようである。原田氏はこの巻だけが本文が元明版と一致するところから、宋刊本から「宋人」が書写した本に基いて補つたものと推定される。（傍線、牧野）

『管見抄』の筆者をめぐる問題は、畢竟するところ、予想外の数で日本に滞在していた宋人書生（写字生）の活動と我が国の書風への影響（親鸞の書風などを視界に容れて

みることも十分に可能であろう）を見定める作業を強いることになるが、その際に東大寺戒壇院系の寺院とその四周は十分に留意検討されなければならないものとなろう。

（まきのかずお・実践女子大学教授）

\* \* \*

本稿は、軍記・語り物研究会大会の報告「延慶本奥書・応永書写『平家物語』四周の書物ネットワーク—東アジア〈から〉の経路—」の一部に若干の加筆を試みたものであり、近時開催された説話文学会和歌山例会（テーマ「根来寺」の輪郭—空間・資料・人—）（2013・12・8、於和歌山大学）における牧野報告（「根来寺」四周と延慶本『平家物語』—その「往還」の試み—）の基礎となる領域の研究である。『説話文学研究』次号所収予定稿を併せ参照願えれば幸甚である。刊刻の面より追尋した「日本中世鎌倉前中期の寺院における出版—その背景と通蔵過程の一、二の事実—」（『アジア遊学』近刊号所収）も関連するものである。

なお、本稿は、科学研究費（基盤(B) 課題番号（2465049））の助成による研究成果である。